
魔国解放前線

マスケット銃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔国解放前線

【Nコード】

N8260T

【作者名】

マスケット銃

【あらすじ】

異世界に連れてこられた高校生 荒樹剣一と仲間たち。
てつきり魔王を倒すために呼ばれたと思ったら、逆に魔王を助けて
ください？

敵は自分たちと同じ日本人？

訳もわからないまま、チート級能力を武器に剣一たちは魔王救出の旅に出る

あらすじ（前書き）

はじめまして、マスケツト銃と申します。

初めて小説を投稿するので文章が可笑しいかもしれませんが、目を瞑って貰えるとありがたいです

最初は短いあらすじだけですが、お茶を飲みながら読んでいたださいね

あらすじ

異世界に召喚された高校生 剣一と仲間たち。

彼らは異世界に連れてこられてテンションが爆発する

ツシヤア！魔王なんざ瞬殺してやんぜえ！

いや、魔王倒しちゃだめだから！

魔王打倒に盛り上がっていると怒られた。

なに？なにか可笑しい事言った？

え、魔王を助けてください？

じゃあ、誰を倒せばいいの？

はい？ 敵は召喚された日本人？

すいません、もう、訳がわかりません：＼（＾Ｏ＾）／異世界物語

バトルもの

残酷な描写あり

主人公たちはチート能力を持っています。

でも最強じゃない

あらすじ（後書き）

次回から話が始まります。

さて、作者はまともな小説を書くことが出来るだろうか！？

さよなら、平凡な世界（前書き）

はい、主人公たちが異世界に行ってきます。
いや、正しくは逝ってきます。

さよなら、平凡な世界

学校の帰りはコンビニでパンを買って帰ることが多い。

別に家は歩いて30分はかからないから我慢してもいいけど、どうしても菓子パンを食べたくなってしまふ。

それに最近出たドーナツが値段が安い割に大きくて味も好みだ。

だから今日も無意識の内に買ってしまった。

「そんなパサパサしたもん、よく食えんな」

「もう、毎日そんなの食べてたら、すぐ太っちゃうよー」

俺の両側からドーナツに対するケチが飛んでくるが、これもいつものことだ。

「バカ、このパサパサ感がうまいんだよ。それに食った分だけ動いてるから問題ない!」

「…見てるだけで喉が乾くな」　いくら力説しても恭祐は納得してくれず、ウンザリした目でドーナツを見る。

そしてリサは恭祐とは逆に羨ましそうに見ている。

「…言っておくけど、一口もやらないからな?」

「ほ、欲しいなんて思っただけじゃないもん!」

そう言っただけで正面をむく。

女の子の中でも背が小さいけれど、異常な程の食欲を持っている。

もしも一口やろうかなんて言ったら、喜んで全部食べるかもしれない。

一口じゃなくて…。

「おまえらなに子供みたいなの!?」

俺とリサの会話にツッコミを入れようとした恭祐の声が途切れる。

「あ?どうし　ハイ?」

不思議に思っただけで振り返れば、恭祐の歩いていた場所にポツカリ穴が

開いていた。

まるで時空が裂けてできた穴は真っ暗で、恐る恐る覗き込んでも何も見えない。

「おい、恭祐！返事しろよ、恭祐！」

声を張り上げて呼んでも返事はない。

「な、なに、これ？もしかして恭祐落ちたの？」

「やばいな…。誰か呼ばー！？」

誰か呼ぼう。最後まで言うことは出来なかった。

急に穴が広がって俺とリサを飲み込んだからだ。

フツと足元の感覚が消えた瞬間、無意識のうちに眩きが口の端から漏れた。

「オワタ＼（＾Ｏ＾）／」

そして視界は黒に支配されて意識も消えた。

こうして荒樹 剣一は異世界に旅立った。

さよなら、平凡な世界（後書き）

こんな書き方で大丈夫か？

……。

……返事が無い。ただの屍のようだ

異世界来たコレ！？（前書き）

異世界来たコレ！？

俺も異世界いつてみたい！

異世界来たコレ！？

いったいどれくらい気を失っていたんだろう。

まず体中の関節が痛い。石の上に倒れていたからしょうがないだろう。

痛む体を無理矢理動かして制服についた汚れを叩き落とし、それから思い切り背伸びをする。

そしてやっと辺りを見渡す。

俺が倒れていたのはごんまりした暗い部屋で、石の床には白い線で紋様が描かれている。

そしてそばにはすでに起き上がっている恭祐とリサが…誰かと話している。相手は二人。

一人は小柄なお爺さんで黒いロープ姿は若干不気味。

もう一人も50歳は超えているだろうが、年を感じさせないがっしりした体躯をしている。

そして銀色の鎧を着込み、赤いマントを纏っている。

さらに頭の上に乗っている王冠は金で、このジメジメした部屋でも彼の存在は輝いていた。

ああ、これってもしかして…。

「やっと起きたか。あのな、落ち着いて聞いてくれよ？…俺たちは異世界に来たようだ」

俺が起きた事に気付いた恭祐が困惑した表情で言った。

はい、やっぱりね。

思わず溜め息をつくとき、王様が申し訳無さそうな顔をする。

「突然呼び出してすまないな、荒樹殿。だが我々には君たちに助けを求めるしかないのだ」

「魔王ですね」

王様が説明しなくても、なぜ俺たちが呼ばれたのかなんて簡単に予想できる。

王様はキョトンとした顔をしているが、俺は王様が言おうとした言葉を引き継ぐ。

「最近、魔王が現れて民が襲われて困っているんでしょ？しかも魔物は強くて国の兵士では歯が立たない。だから異世界から勇者を呼ぶしかなかった。

そこで俺たちが召喚されたってことだろ？」

一息で言い切るにはセリフが長すぎたが、最後はビシッと決めなければいけない！

俺は自分の胸を強く叩いた。

「安心してくれ！魔王はこの俺が倒してみせる！」

「わ、剣ちゃんかっこいい」

うん、そこで小さな拍手してくれてありがとね、リサ。

しかも綺麗な笑顔で言ってくれてとても嬉しいです。

でも、なんで王様とお爺さん、恭祐はポカンとしているの？

あ、もつと安心できる言葉が欲しかった？

あ！もしかして勇者は俺じゃなくて恭祐かりサだった！？

く、た、確かに恭祐は背が高くて眼鏡をかけているから知的に見える。

しかも剣道部の部長でチンピラは何人も叩き潰している。

しかも涼しい顔で…。

リサは華奢で頼りないかもしれないが、小動物のような可愛らしさのもと、歴戦の戦士が集まるかもしれない。

あ、あれ、これじゃ、俺モブじゃね？

待て、諦めるな、俺！

ここで頑張れば勇者になれ
バシーン！！

グルグル一人考えていると王様に頭をグーで叩かれた。
しかも痛い痛い。

思わずしゃがみこんでしまった。

王様は腕を組んで俺を睨んでいた。

すいません、とりあえず叩いた理由を教えてください。

そして顔がとっても怖いです…。

「まったく、なんてことを言うんだ！私が君たちを呼んだのは魔王を助けてほしいからだ！

いくら錯乱しているとはいえ、同盟国の王を倒そうとは言語道断だ
！」

それから一息ついてさらに言った。

今度は言いにくそうに、申し訳なさそうだった。

「さらに言うておくが、倒してほしいのは、君たちと同じ異世界人なんだ…」

……なんだって？

この時、俺は間抜けな顔をしていてもしょうがないと思う。

異世界来たコレ！？（後書き）

あれ、勝手に騒いでいたのは剣一だけじゃね？
やっちまった（＾Ｏ＾）ノ

状況説明（前書き）

長い説明になります。

はい、寝ないで見えていつてね

状況説明

俺たち三人は王様とじいさんに客間に連れていかれた。

四人家族が普通に生活出来るほど広い部屋で王様と魔導士ウォルラン（爺さんの名前）からこの世界の簡単な説明と状況を教えてもらった。まず、ここはアノマシルフと呼ばれ、剣と魔法のファンタジーな世界である。

アノマシルフはオーストラリア大陸の形に似ていて、8つの国が存在している。

カーナミア王国

俺たちがいる国で大陸の左下に位置する。

国土のほとんどが草原なため、強力な騎兵を揃えている。さらに農作物も豊かで交易も盛んだ。

カーナミアの右、中央の下側にある国がラリリュス。

カーナミアと似た国土で強力な騎兵隊がある。

さらに機動力を生かして敵を遠くから攻撃する弓騎兵がいる。軍勢力ではラリリュスのほうが上だとか。

ルサカ

大陸の右下に位置する傭兵国家。

国自体は軍隊を持たず、お抱えの傭兵団が国を守っている。治安が荒れ気味で盗賊や海賊の温床となっている。

ポートンとイエルガ王国。

大陸の中央とその上にある国。

二つは商業の国で大陸の位置的にも貿易が盛んである。

バルカニア帝国

大陸の右側を大きく占める大帝國。

大陸最強国家であり、文明も進んでいる。

しかし、人種差別が激しいために多民族との争いが絶えない。

新羅国

大陸の左にある複数の島を治めている。

独自の文化を築き、他国とは極一部としか貿易していない。

日本に似ていると思ったが、日本人とは違い、新羅国の人間は肌が褐色で手足が長いようだ。

そして最後に魔国。

カーナミアの上に位置するこの国は魔族が支配していて、魔法に優れた軍隊を持っている。

高い山が連なつた寒い国で一時は新羅と同盟を結んでバルカニアと戦争をしていた。

今ではバルカニア以外の国とも同盟を結んで友好的な関係を保っていたみたいだ。

しかし、一年前にバルカニアが異世界から勇者を呼んでから変わってしまった。

異世界から呼ばれた勇者はその超人的能力で次々に魔国の主要地を落とし、わずか半年で魔都を陥落させた。

バルカニアの王は勇者が短期間で魔都を落としたことに喜んでいて、それも長くは続かなかった。

勇者の反乱。

勇者はバルカニア帝国の侵攻軍と服従させた魔族を率いて帝国の都を占領したのだ。

なんとか王族は脱出して第二の都と呼ばれる街に本拠地を移し体勢を整えた。

数では帝国が上だし、魔国でも新羅の応援を受けて戦い続ける魔族がいる。

が、勇者軍には帝国の精鋭部隊と魔族の異形の軍団。

さらには異世界から呼び寄せた一騎当千の仲間たちがいる。

なんとか粘っているけれど、帝国の旗色は悪い。今はバルカニア帝国と魔国残存勢力VS勇者軍であるが、戦火が飛び火する前になんとかしないといけない。

カーナミアの魔導士たちは勇者に負けない強い異世界人を呼ぶことにした。

そうして呼ばれたのが俺たちなんだそうだ。

睡魔に抵抗して聞いていたが、なんていう王道ブレイク…

勇者ってどんなひどい奴なんだよ！

これじゃ魔王を召喚したみたいじゃん！

あ、ちなみに魔王は魔都から脱出してカーナミアに向かっていているらしい。

「でも私たちは戦ったことなんてないんですけど…」

ここまで話を聞いていたリサが不安そうに言う。しかし王様は人を安心させる優しい笑顔で応える

「大丈夫だ、問題ない。勇者が言うには君たち異世界人はこっちに来ると特別な力に目覚めるそうだ。まあ、それについて話す前に一休みしないか？」

君たちもいきなりのこととで疲れてるだろ」

その意見には賛成だ。

なんだかんだで俺も疲れた。

だが、どうしても聞きたいことがある。

部屋を出て行こうとする王様を呼び止めて質問した。

「あの、俺たちの世界に帰る方法はあるんですか？」

「もちろんです。時間はかかりますが、あなたがたの世界に送り返す事は出来ますぞ」

わあ、なんて準備の良いことで…

て、おや？

「ウォルランさんって喋れたんだ…」

「失礼な。王が全て説明するから喋る機会がなかっただけです！」

ああ、そうだったんですね…

状況説明（後書き）

ああ、そろそろ戦闘が書きたいな

ひとまず休憩（前書き）

うーん、もっと早く話を進めたほうがいいのかな？

ひとまず休憩

とりあえず3人だけになると、リサがソファに寝転んで大きく伸びをする。

「なんか、とんでもない事になったね…」

「まさか勇者退治とはな…」

恭祐も疲れたように呟く。

まあ、ね。いきなり異世界に連れてこられて長い話を聞かされて、勇者をなんとかしてくれて言われてもな。

ファンタジーな展開に胸熱な俺でも今は疲れてる。

「勇者様は何を考えて戦争始めたんだろ？」

そんなこと俺だって知りたい。

長くつらい頭がいかれてしまったんだろうか？

人間側に非があつて、それに気づいた勇者が逆襲しようとしたとか？

理由がなんであれ、勇者を止めることなんて出来るんだろうか？

俺はただの高校生で得意なのはサッカーで、剣や魔法ではない。

リサも頭が良いけど、運動能力は全くない。

恭祐は剣道が出来るけど、実戦に通じるのかわからない。

そもそも俺たちは命をかけて戦ったことがない。

そんな俺たちに勇者を止めるなんて無茶ぶりだ。

「どうすりゃいいんだよ…」

ファンタジーな世界に行ってみたいと思った。

仲間たちと協力して悪い奴を倒したいと思った。

けど、実際に願望が叶うと、なにができるのかもわからず、ただ怯えているだけ。

情けなくて涙がでそうだ。

悔しさのあまり、顔をしかめていると、恭祐に頭を叩かれた。

「痛い!？」

「なに一人悩んでるんだ。おまえらしくないな？」

「悪かった。俺だってそれなりに考えてるんです」

「止めとけ。考えても情報が少ない

とりあえず今は休め」

「…おまえがそう言うなんて珍しいな？」

俺の知ってる恭祐は一度考え出したら、自分が納得するまでやめない。

そんな男が一番に休もうと言い出すなんて…。

こいつもよほど疲れてんのかな？

俺がそう思っただけだと見ていると、恭祐は居心地悪そうに辺りを見渡す。

「なんだか、嫌な予感がするんだ…。だから今の内に休んでおいたほうがいい」

「まじかよ…」

最悪だ。恭祐の「嫌な予感」は結構な確率で当たる。

中学の修学旅行では男と恭祐の班が京都で迷子になるし、体育祭の騎馬戦じゃクラスメイト4人が大怪我をした。

今度は一体どんな目に遭うんだろうか。

それに不幸な知らせを聞いたら安心して寝れないっつの。

さつきから静かになっているリサを見てみれば、ソファの上でダラーンと寝ている。

くそう、幸せそうな顔しやがって…。

リサの寝顔を見ながら、少しでも希望を持ちたくて恭祐に聞いた。

「一応聞くけどさ、どのくらいやばい気がする？」

「…野犬の群れに終われた時よりやばい事が起きそうだ」

俺は思わず大きな溜め息を吐いてしまった。

どうしたらそんな状況になるのか聞きたかったが、死の宣告を受けた今の俺には尋ねる気力も失せてしまった。

ああ、神様。明日なにがおこるんですか？コンチクショ―

ひとまず休憩（後書き）

さて、次の日はなにが起きることやら？
戦闘はまだ先ですが、あせらずゆっくりしていったね！

城下町探索（前書き）

剣一たちは城下町を探索するみたいです

城下町探索

次の日、俺たちは城下町を散策することになった。

王様も「一週間ぐらい滞在してから勇者討伐をするか決めると良い」と時間をくれたから、俺たちも好意に甘えて時間をかけて決めようと思う。

道が石畳で整備された街は威勢のいい声が店から飛び交い、たくさんの人が道を埋めてる。

「うわぁ！城の中も凄かったけど、ここも人が凄いな！」

「騒ぐな。みつともない」改めて異世界に来たことを実感する俺は確かににはしゃいでるかもしれないが、それはしょうがない。

こんな中世のヨーロッパみたいな光景を見れば誰だってテンションが上がる。

逆にいつも冷静でいられる恭祐のほうがおかしいだろ。

リサだつて目を輝かしてるじゃないか！「とりあえず街を廻りましょう。裏通りは危険ですので、今日は大通りだけにしてください」

護衛兼案内役であるサティアさんが注意をする。

俺たちは城から服を借りているから見た目の問題はない。

しかし、シミ一つない清潔な服は金を持っていると宣伝しているようなものだ。

サティアさんの言うとおりにするのが賢明だ。

が、頭の中ではわかってる。

わかってるんだが…

「よし、とりあえず片っ端から見ていくぜ！」

「お！」

やっぱり我慢できませんでした

サティアさんの制止も無視して、リサと一緒に興味を引いた店を見ていく。

様々な武器が並ぶ店やアクセサリーを売っている出店をのぞいたり。怪しげな薬を売るおばさんからチンプンカンプンな説明を聞かされたり。

何時の間にか恭祐も加わって色んな物を見て回った。

変な形をした果物が並ぶ店を眺めているとき、声をかけられた。

「ちよいとそこの坊や。こっちにきてくれんかね？」

「…俺？」

「そう、おまえさんだよ」

声をかけてきたのは…とても怪しいお婆さんだった。

俺の腰より小さい体をボロボロなマントで覆い、木の杖をついている。

しわだらけの顔の中で大きな目が爛々と輝いていて、長い鷲鼻と合間って魔女のようだ。

はつきり言って怖い、この婆さん…。

こんな時に限ってリサや恭祐、サティアさんはそばにいない。

婆さんは甲高い笑い声を上げる。

「老いばれに怯えるんじゃないよ、坊や。わしはただ、おまえさんに良いものをやろうとしているだけさ」

「良いもの？」

「そうさ。ほれ」

そう言って婆さんが差し出したのは石が一つはまった鉄の腕輪。はまっている石は硝子みたいに透明で、覗けば中がキラキラ輝いている。

知らない人から貰ったらいけないと教えられたが、何故か目を逸らすことができなかった。

「迷う必要はないよ。いや、迷っちゃいけないね」

婆さんは体を揺らして俺の迷いを笑う。

「さっさと受け取ってくれんかな。老婆も死ぬのは嫌だからね。泥人形が現れる前に逃げたいんだ」

「は？」

泥人形？ 何のことだか聞きたかったが、婆さんは俺の手に腕輪を押し付けるとさっさと群集のなかへ消えてしまった。

「おい、ちょ…！」

紛れ込んだ小さな体を探そうとしたが、視線を左右に走らせても見つからない。

その時、怖い顔をしたサティアさんが俺の肩を掴んだ。

あら、なんでそんな怖い顔してんの？

もしかして俺、勝手にはぐれたと思われてる？

高校生になって怒られんの？

うわ、それって凄く恥ずかしいんですけど…。

恭祐が緊張した顔で辺りを見渡す。

「不味いぞ、剣…。俺の予想が当たった…」

あ…マシで…。

「私から離れないでください。貴方たちは絶対に守ります」

サティアさんが剣を鞘から抜いて構える。

リサが不安そうにサティアさんの背後に隠れる。

「で、でもサティアさん一人じゃ…」

「大丈夫。絶対に護りきります」

「サティアさんも危ないですよ！みんなで城まで逃げようよ！」

「いや、無理みたいだぜ…」

俺は体中から汗が噴き出すのを感じながら呟いた。

買い物していた人たちが悲鳴を上げて逃げ出す。

「もう、囲まれてるぞー！」

城下町探索（後書き）

勇者になればさ… 人の家漁り放題なんだよね…
いいよね…ぐへへ

初めての戦闘

振り下ろされる剣。

なんとか身をそらして避けると、思い切り両手で突き飛ばす。

相手は吹き飛ばされて屋台を破壊して倒れた。

自分より体格がある相手を漫画みたいに吹き飛ばしたことにびっくりした。

が、再び剣が繰り出されて感心する暇はなかった。

俺はなんとか後ろに跳んで逃げる。

「なんなんだよ、こいつら!？」

「勇者軍の兵隊です! 気をつけてください。頭を破壊しない限り倒れません」

勇者軍の兵隊は悪者の姿をしていた。

刃の幅が広い剣が片手で扱える斧で武装している彼らは迷彩のズボンに黒の皮鎧。

頭も黒い頭巾で隠している。

頭巾の隙間から赤い光が一つ漏れている。

あれは目なんだろうか？

「くそ、異世界に来てすぐ戦闘かよ!」

敵は4人。二人をサティアさんが相手をし、一人を恭祐が相手にしている。

恭祐は拾った鉄の棒で戦っているが、ギリギリと押されている。今の俺は素手だけど、後ろにはリサがいる。

リサも手に木の棒を持って戦おうとするけれど、今の彼女では簡単にやられてしまうだろう。

「リサ、危ないから下がってろ!」

「なに言ってるの! 剣ちゃんだってなにも持ってないでしょ!」

「ならその棒を貸してくれ!」

「ダメ！私だって戦うもん！」なに变な意地張ってんだ！
そう怒鳴りつけてやりたかったが、兵隊の攻撃を避けるのに精一杯だった。

大振りで振り下ろされる剣を避け、返す刃もしゃがんで回避する。
連続する攻撃を避けながら、王様が言っていた通り、身体能力が上
がっている事を実感した。

敵も剣を大振りで振るために避けることに集中すれば当たらなそう
だ。

また首を狙った横薙ぎの一撃を僅かな動作で避ける。
いや、避けたと思った。

兵隊は剣を振り切った体制から器用にも、俺の脇腹に蹴りを入れて
いたのだ。固いブーツが容赦なく肉に食い込む。

今度は俺が吹き飛ばされて地面を転がる。

「っあ……！」

俺の場合、兵隊と違ってすぐには起き上がれない。

呼吸をしようと魚みたいに口をパクパク動かすが、息が吸えない。

「剣ー！」

遠くで恭祐が叫ぶが、前を兵隊が邪魔する。

ここからじゃわからないけど、サティアさんも二人を相手にするの
が精一杯だろう。

つまり、今、倒れてる俺は邪魔されずに殺せるわけだ。

なんとか上半身を起こして少しでも距離を取ろうとするが、兵隊は
無遠慮に近づいて来る。

嫌だ！死にたくない！

必死に願う俺を嘲るように兵隊は剣を振りかぶり

！

「剣ちゃんから離れて！」

後ろからリサが木の棒で殴りかかる。

彼女としては決死の一撃だっただろうが、簡単に払いのけられる。

「キヤア！」

地面に倒れたリサは痛みに呻いて動かない。

兵隊は一瞬だけ俺とリサ、どっちを先にしようか迷ったが、先にリサを殺すことに決めたらしい。

リサの頭を掴んで無理矢理立たせる。

「まてよ。このやろう…」

俺は体の悲鳴を無視して立ち上がる。

仲間が殺されそうになっているのに、蹴られた痛みなんて気にして
いられるか！

が、起き上がった俺は脅威にならないようで、兵隊は構わずにリサの首に剣を当てる。

「待てって言ってるだろ！」

俺は叫んで兵隊に 殴りかかる。

その時、右腕が強く輝きだした。

チュートリアル（前書き）

ちょっとだけ剣一的能力が開花します

チュートリアル

俺の拳が兵隊の側頭部を捉えた瞬間、頭が大きな音をたてて陥没する。

殴られた勢いのまま、地面に叩きつけられる兵隊の体。

頭の半分が凹んだ兵隊は目から光がなくなると動かなくなった。

「ダウンロード終了しました。」

どこからか女性の声がしたけれど、今の俺には答える余裕はなかった。

体全身を覆う赤と黒に塗れた鎧。その隙間からは炎が噴き出している。肌に触れていても不思議と暑くはない。

腕を守る籠手は二回りも大きくて指先が鉤爪状になっている。

今の俺は厨二病患者が羨む格好になっている。

「剣ちゃん、それってコスプレ？」

「ちげえよ！」

なぜこのタイミングで言う！

そう突っ込んでいると、再びさっきの声が聞こえた。

「おはようございます。戦闘のチュートリアルをしますか」

声は右腕の籠手にはまっている石から聞こえる。

「ち、チュートリアル？」

「はい。ダウンロードが終了して目覚めた能力、戦い方、敵の情報などを説明します」

「へえ、なんだかよくわからないけど、ぜひ頼む！」

「わかりました。チュートリアルを始めます」

まるでゲームの説明をするように声は淡々と話す。

「敵はローグ。勇者軍の下級ゴーレム。弱点の頭部を破壊してください」

「わかった！」

さっそく恭祐と戦っているローグに殴りかかる。

さっきまで凄く怖かった相手だったけど、今じゃ何とも思わない。
恭祐に集中していたために接近する俺に反応が遅れた。

「から空きの胴体を蹴りつけられ、体をくの字に曲げて倒れる。」「剣
一、おまえ……」

「今は後にしてくれ！」

起きあがる前に頭を破壊したかったが、小道から三人のローグが飛び出してきた。

「剣一さんは炎を操る事ができます。掌に力を溜めるイメージをしてください」

「お、おう」

声の言う通りに掌に力を集めようと意識してみる。
すると掌一杯に炎が生まれる。

「ボールを投げる要領で炎を投げてください」

「うおりゃ！」

指示に従って炎を全力で投げる。

真ん中のローグに炎が直撃。

爆発してそばの二人が吹き飛ばされる。

その威力に投げた俺自身も驚いた。

が、いつまでも固まっている暇はない。

先ほど蹴り倒したローグが立ち上がって切りかかってきた。

「近接した場合、手や足に炎を纏えばダメージが上がります」

「こっか？」

今度もイメージして炎を纏った拳で胸を殴れば、ローグの服が燃え上がる。

ローグはしばらく炎を消そうと無言のまま悶えていたが、やがて倒れて動かなくなった。

残るはサティアさんを囲う二人。

いや、一人を倒していたが、三人に囲まれていた。

いくら騎士でも三人を相手にするのは厳しい。

しかも鎧ではなく私服なため、刃から身も守れず傷を受けている。

「剣一、助けにはいるぞ！」

そう言つて恭祐が助けに入る。彼も戦い方がわかってきたのか、それとも恐怖心が薄らいだのかわからないが、さっきよりも早い動きで攻め立てる。

俺にも一人のローグが向かってくる。

「オラァ！」

俺は燃える拳で殴りつけるが、服が燃えるのも構わずに腕で防御される。

どうやら頭が無事なら体が燃えてもいいらしい。

ローグは俺が近すぎたために斧が振るえず、代わりにがら空きだった腹に膝を打ち込む。

いくら鎧に護られていても、打ち込まれる衝撃に息が詰まる。

「つてえな！」

湧き上がる怒り。

感情に合わせるように拳の炎が大きくなる。

俺はもう一度腕を振りかぶる。

ローグが腕を交差して受け止めようとする。

が、拳がぶつかった瞬間、炎が爆発してローグの体を塵に変えた。

「戦闘終了です。お疲れ様でした」

声が宣言すると、俺の体を護ってくれていた鎧がフツと消えた。

「剣ちゃん！恭祐！」

リサが俺に駆け寄ってくる。

俺のそばではローグを倒した恭祐が座り込んでいる。

サティアさんは傷を負っているのに駆けつけた騎士二人と話している。

と言つか今更来るなよ…。

力が抜けた俺はその場に倒れた。

「もう、無理……」

情けないとは思っけど、初めての殺し合いに精神が尽きた。
最後にリサたちが慌てて近づいてくるのを感じて意識が途切れた。

実感（前書き）

えー、作品投稿が遅れてしまい、たいへん申し訳ございません（；・
・）

なるべくこれからは遅れた分を挽回したいと思いますが、亀更新
になっても許してね…

実感

目を覚ますと、俺は見覚えのある部屋で寝ていた。

「ん…、なんでここに…？」

強張る体を叱咤して体を起こして、辺りを見渡す。

王に与えられた部屋には誰もおらず、部屋の広さを改めて実感し、同時に寂しさを覚えた。

「おはようございます。疲れは取れましたか？」

「ん、まあ、取れたかな」

右腕にはめてある腕輪が心配そうに声をかける。「私のダウンロードが遅れたためにご迷惑をお掛けしてしまい、大変申し訳ございません。蹴られた所は大丈夫ですか？」

「…うん、大丈夫だよ」

なんとか言葉通り、元気良く応えようとしたが失敗した。

男なんだから平気でいたかったけど、ローグに殺されそうになったことを思い出してしまい、吐きそうになった。

これが剣と魔法のファンタジー…。

弱かったら切り捨てられ、魔法で殺される世界。

あの戦闘で、自分がどれだけ夢を見ていたのか思い知らされた。

「やつぱ、俺に戦うなんてむりかな…？」

俺が怖がっているのを見抜いたのか、腕輪は優しい声で話しかける。

「…剣一さん、あなたが戦闘に関してまったくの素人です。けど、それでも私はあなたを全力でサポートします。だから決して自分を軽蔑しないでください。今はなにもできないヘタレかもしれませんが、私が必ず強くしてみせます！」

その声は必死で俺を励ましてくれていた。

「あの時なにもできなかった俺でも？」

「なにもできなかった？なにを言いますか！あなたはすぐに自分の能力を駆使して敵をたおしたじゃないですか。自分に自信をもってください！」

「そっか…、じゃ、少しずつでも強くなってくよ」
俺は自分に誓うように言って腕輪を撫でた。

しかし、世界はなにもかも知らなくて、弱い俺に優しくはなかった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8260t/>

魔国解放前線

2011年10月9日07時47分発行